



京都の民主運動史を語る会 会報 題字 住谷悦治

代表 岩井 忠 熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込口座番号〕

01060-7-15762

加入者名 燎 原 社

琵琶湖畔（旧木津港の常夜灯）



田中 弘 画

ある作家の追憶

安本 久米雄

歴史的な勤評・安保の
たたかいに参加して（六）

湯浅 晃

憲法改悪は
徴兵制をよびこむ

岩井 忠熊

「反戦・平和」に生きた
一財界人を悼む

村島 昭男

追悼（柴田好人氏）

編集後記

ある作家の追憶

安本 久米雄

昭和六年ごろかと思うが「綿」
「幼き合唱」「清水焼風景」など
を書いて急に有名になった須井
一（すいはじめ）という作家が
あった。今ではプロレタリア文
学に一時期を画した名作と評価
されているが、当時も一作ごと
に評判が高かった。その人が京
都在住だということ、それが
ペンネームで、いったい誰なの
か見当がつかないという点で、
われわれ一部の京都の学生たち
の好奇心をかき立てた。その人
をつきとめて、一度会ってみよ
うではないかと、三人ほどで、
あれが須井だとうわさになっ
ている男を訪ねたことがあった。

それは安達という青年で、当
時三条河原町にあった「ソビエ
ット物産」に勤めていた。彼は
その店で売っているキャンデー
をわれわれにふるまいながら、

自分が須井であることをしぶし
ぶみとめ、文学論を一席ぶち、
当時中央公論が改造に連載中だ
った「労働者源三」という小説
のストーリーを、こういう風に
発展させるつもりだ、などと話
した。

事実、次の号で筋はその通り
に進行していた。しかし、どう
も、くさかった。須井であるこ
とを印象させようという行為め
いたものがどこかに感ぜられた。
しかし、それが誰であろうと大
したことではないので、われわ
れの好奇心もすぐさめて、何年
かたつた。私はその後、大阪の
ある新聞に就職し、学芸関係の
仕事をしていたので、その頃活
動している加賀耿二という作家
が、かつての須井であり、本名
は谷口であることももう知って
いた。ところがある日、ふいに、

その加賀耿二の来訪を受けたの
である。

ある人の紹介で、外信部にい
たKと私を訪ねて加賀氏がやっ
て来た。社の近くの喫茶店で三
人で話したが、用件はその当時
日本が満蒙に送り出していた武
装移民を題材に書きたいので、
資料があれば見せてほしいとの
ことだった。ろくな資料もない
と思うが、集めてみましょう、
ということ、後は雑談した。
紺の背広を着て、眼の光に強い
落ち着きをもった人だった。私
もむかし影武者にたぶらかされ
た思い出など話して皆で大笑い
した。

その後、戦争はしだいに苛烈
になり、彼などの執筆の自由は
奪われてしまった。風のたより
に、彼が貴司山治という作家と
一緒に丹波の山奥にこもって開
拓生活をやっていると聞いたの
は、もう空襲のはげしくなった
ころであった。

戦争が終わると、それまでも
の書けなかつた作家たちが続々
筆をとりだした。私はその時分、
週刊誌の編集部にいたので丹波

の山奥まで若い記者に行っても
らつて、三〇枚ほどの短編を依
頼した。「とてもひどい生活で
したよ。」と、感に堪えたよう
にその記者は帰つて来て話した。
約束の日に加賀氏は編集室に
現われた。数年前に会ったとき
と較べて、労苦はこの人を別人
のように老けさせていた。原稿
を入れた汚いリュックサックを
背負い、よれよれの兵隊服らし
いものを着て、しかし顔だけは
晴れやかに、親しさがちかに人
を惹きつけるようなほほえみを
浮かべて……

彼の復帰第一作にしたいと思
つていた折角の原稿は使わなか
った。芋泥棒の話であったが、
長いブランクの後であり、こち
らの期待に残念ながら少し外れ
ていた。依頼して掲載しない非
礼を詫びて、原稿料は普通以上
に送つたと記憶しているが、原
稿は机の引き出しに寝かせたま
まで、私は次の機会を期した。
けれど加賀耿二は再び文学の世
界へは帰つて来なかつた。はげ
しく揺れ動く政治の中へ、まっ
すぐに彼は進んでいった。

つい二週間ほど前の六月のある朝、目をさまして洗面に立つ私に、台所から家内が声をかけた。

「谷口さんが死にましたよ、惜しいですね。」

私は急いで玄関の下駄箱の上のついている新聞をとって社会面をあげた。ない。対向面に目を走らせたが、そこにもなかった。

「ないよ。」

「二面ですよ。一面。」

ああ、そうか、彼はすでにれっ

きとした政治家であった。その党の衆院議員団長であった。かなりのスペースでその訃が報ぜられていた。

私は水道の蛇口をひねって洗面しながら、あの原稿のことを思い出していた。あるいはあれが、作家として最後の原稿ではなかったろうか。あれを保管する責任が自分にあつたのではないだろうか。知らないうちに過失を犯したような自責の思いが心に重く沈んでゆくを感じていた。(原文 一九七四)

歴史的な勤評・安保の たたかいに参加して (六)

湯浅 晃

一二、安保反対闘争が大きくもり上がった背景と私たちのたたかう決意

今日の情勢と大きくちがう点は多くの労働者、学生、青年、婦人が、歴史の進歩に確信をも

っていました。独占資本主義支配の時代から社会主義の時代への発展を当然のことと考えていました。いまこれを裏打ちすることをいちいち説明する紙数はありませんが、いくつかわかるところを列挙してみると：

一九五五年のバンドン会議(新中国を先頭に新しいアジア・アフリカの時代を印象づけた)。民族独立は世界の流れ。五八年と六〇年の世界の共産党・労働者党の団結の動き。私たちは、ソ連などが社会主義とは無縁な独裁国家になり下がっていることは、残念ながらもまだわかりませんでした。社会主義陣営、民族解放運動、資本主義諸国の労働者階級を先頭とする民主勢力を、世界の三大進歩勢力と考えていましたし、その運動が展開していました。一九六〇年、韓国の高校生はアメリカのカイライ政権であった李承晩内閣を打ち倒していました。

このような国際情勢にはげまされつつ、わが国の春闘ははじめ労働運動の発展、学生運動など民主運動が展開していました。これが、勤評、警職、安保の運動と結びついて、大きくもり上がっていったわけです。そして、運動がひろがり多くの活動家がそだっていききました。

長い歴史の中では、運動の高揚と退潮があるものです。

大企業が不況下にもかかわらず、史上空前の利益をあげているが、賃上げ、労働時間短縮、勝手な配置転換反対などの労働運動のもり上がりにかけています。伝統ある「春闘」は事実上つぶされ、労働組合の組織率も残念ながら年々低下しています。大学の「産学共同」はすすみ、かつてのような学生運動はみられません。これ以上列挙することはやめますが、私たち自覚的な民主勢力の努力にもかかわらず、おこっている問題の大きさに比べて、かつての運動(集会・デモ・ストなど)の参加者にくらべれば、一ケタか二ケタ、参加人数が残念ながら少ないようです。

労働者の組合加入者が減り、労働者、国民の集会・デモなど大衆的な参加者の減少がみられるのは、支配者側やマスコミの思想攻撃もありますが、基本的には、かつてのように、仲間同士が助け合って団結して行動してこそ、攻撃をはねかえし、歴史を進歩させることになるという理解がとほしくなってきた

ることに原因があると思います。これには、日米安保条約反対のかつてない運動の高揚に恐怖を感じた支配階級（自民党と独占資本）が六〇年代にはいつて、母親大会、原水禁運動への分裂攻撃、「高度成長」のなかでの同盟など反共労使協調勢力の育成ばかりか、総評内の鉄鋼労連などの単産の「右傾化」をおしすすめ、革新勢力を分断し、革新勢力の力をそぐことに力を注いできました。これが「成功」して今日のような状況をつくりだしてきたと思います。

このような攻撃にたいして、当時、革新勢力の中で大きな力をもっていた社会党・総評の指導部は、これと正面からたたかわないばかりか、これに協力するという姿勢をとってきました。特に、のちに労働戦線問題では、ましな姿勢をとった太田・岩井らの総評指導部は、私たちが切実に要求していた安保改定阻止国民会議の活動の存続を拒否し、革新勢力の団結に大きな打撃をあたえました。一九六二年の東京での第八回原水禁世界

大会では、総評は公然と会場の演壇を破壊して、太田・岩井らは率先して会場から退場し、翌一九六三年の広島第九回世界大会では、総評・社会党は当局と手を結んで、世界大会の参加者を会場からしめだし、ついに原水禁運動を分裂させました。私はこれらの大会に参加して、彼らの蛮行を直接体験しています。大会に参加を予定していたソ連は、社会党・総評と行動をとるにしました。

私たちはやむをえず、東京でも京都でも「安保放棄実行委員会」を結成し、安保条約破棄の運動をつづけてきました。今日でもその事務所は京都教育文化センターにあります。

革新勢力への分断攻撃、反共攻撃の系統的な育成のほか、六〇年代前半からはじまった高校教育を差別的に再編成しようとする「多様化」の攻撃を看過することはできません。文部省は戦後の新制高校の制度を破壊し、高校段階での基礎的な教養科目の単位をへらし、企業のアプローチの要求に応じて「多様」な

小科目を設置して、他方で学区制廃止なども強行して、戦前のように高校間の格差をひろげていきました。このように基礎的な知識を軽視した結果、生徒達はかつてのようにお互いに助け合って勉強する気風がうすまり、一人ひとりが自分の「努力」で進路を決めざるをえなくなり、生徒会活動なども衰微していききました。このような状況はやがて大学でもみられるようになっていきます。今日で言う「競争原理」によつて、生徒たちは互いに助け合うよりは、他を押さえて進路をきり開くといった風潮がよまってきました。

この一〇年、二〇年のこのような傾向の克服は民主勢力全体の重要課題です。しかし、これを克服する特效薬はありません。いかに情勢がきびしくとも、自覚的民主勢力はいままで通り、労働者・国民の重要な諸要求については、規模は小さくともねばりよく集会・デモ・ストなど多様な抗議行動を組織して、将来にむかって基礎的な力をたくわえていくべきです。よく影

響をひろげていく上で、要求で行動をひろげていくと同時に、私はさらに行動を通じて、思想的に獲得して組織化していくことを重視していきたい。きびしい条件下におかれた労働者・国民はまだ自らは参加してはいないが、私たちの取り組みを注目していると思います。いまの耐え難い矛盾はやがて、運動に反映しひろがっていくものです。

日本の現状はやや例外的で、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・南北アメリカでは、集会・デモ・ストなど多様な抗議の行動は国民の有力な運動として、今もつけがれていきます。アメリカ追隨のもとで、「経済大国」か「政治大国」をめざす日本の支配階級は思想攻撃で国民を抑えていますが、やがて一層大きな抵抗にあり、私たちの運動が必ず復活してくると思います。

一三、勤評・安保反対闘争に関連していくつかの書き留めておきたい事項

①六〇年安保反対闘争の中で、挑発的な役割を果たした「全

学連」のトロツキスト暴力集団

社会党・総評指導部のイニシアのもとで、歴史的とはいっても安保反対闘争はまだ不十分な側面をもっていました。その決定的な弱点は、すでにふれてきたように彼ら指導部が革新統一戦線の立場に立っていないなかつたということでした。だからセクト的な立場に立って、対等・平等の共闘を拒否してしまいました。安保改悪が強行されたあと、私たちは、運動の巻き返しをしていくために、安保改定阻止国民会議の存続をよく訴えてきましたが、彼ら指導部は中央の国民会議を解散し、各地域の安保共闘会議から抜けていきました。

当時、運動が大きくもりあがったとはいえまだまだ民主勢力の主体的力量は不十分で、大きな比重を占める農村地帯は自民党がおさえていました。

このような状況下では、ねばりよく共闘をひろげ国民の間に運動をひろげていくことが求められていました。しかし、

安保反対闘争の中にもぐりこんでいた「全学連指導部」は整然とくりひろげられていた国会への請願とデモを「葬式デモ」などと嘲笑し、ついに「全学連」のデモ隊を国会の中に突入させ挑発をくりかえしてきました。この挑発的暴挙は官憲の弾圧をまねき運動をうきあがらせ、運動全体に打撃を与えました。一九六〇年六月一五日の突入で学生の樺美智子が死にましたが、このことよってこの暴挙を美化することはできません（私は戦後全学連結成大会に参加し、その後労働運動に参加してからも、全学連の運動に関心をもってきました。六〇年当時、京都でも多くの学生自治会が残念ながらトロツキストの影響をうけましたが、いまの京都教育大学の自治会は田中弘委員長を先頭に統一戦線の旗をまもっています。）

② 高校生の安保反対などの政治活動とその組織について

日本では、選挙権はまだ二〇歳で、そのくり下げがなかなか議論にならず、文部省・教育委員会・学校当局も高校生はまだ成長過程の若者扱いで、その政治活動を認めてきませんでした。しかし、六〇年の安保反対運動のもり上がりの中で各校の生徒会が安保問題をとりあげて議論をすすめる、他校とも連絡をとり合って、地域の集会やデモに参加し何回か国会へ請願団を派遣できるようにになりました。私は当時、京都市高教組の副委員長をつとめ、出身職場では「生徒部」につとめていましたが、よく生徒達と一緒に集会・デモに参加し、費用を節約するため京都から東京まで一二時間かかる夜行普通列車にのって、生徒達に付きそって国会にもでかけました。

このような中で、全国で、京都の全日制生徒会と定時制生徒会がそれぞれ学校の枠をこえて、連絡組織をつくって活動することが教委によって認められるようになってきました。他府県では、高知でも同じような組織が作られ、高校生が活動しました。

しかし、その他の都道府県教育委員会は、高校生の政治活動を認めず、生徒会の連絡組織を認めようとしませんでした。多くの国で採用されている一八歳選挙権を日本でもとりあげていく必要があります。

③ フランス・デモについて

安保反対闘争がもり上がっていると、特に都市部では多くの国民が私たちの集会やデモに公然と共感の態度をとりました。このような中でデモも通りいっばいに広がって行進する当時フランス・デモといわれたデモがくりひろげられました。

京都市内でも河原町通りなどでフランス・デモがおこなわれ、市電や市バスは全面的に運行が中止されましたが、多くの市民は文句を言わず、デモに連帯する態度をとりました。安保反対の運動に対する共感がひろがっていたのです。

憲法改悪は徴兵制をよびこむ

岩井 忠熊

イラク戦争のテレビ

テレビでファルージャヤの市街戦の様相を見る。三十万人の住民が米軍の攻撃予告で十万人になった。そこへテロ勢力せん滅と称して、米軍は無差別に戸ごとのしらみつぶし作戦に出ている。米兵はヘルメット、防弾チョッキに自動小銃をもち、弾帯を肩からななめにかけている。また軍服のポケットも異様にふくらんでいる。何キロになるか知らないが、一見して相当の重量になることが分る。あの重装備で機敏に走り回らなければ、自分の命もあぶない。二十歳代から三十歳代前半まででなければ、つとまらないだろう。

ああいう近接戦闘では、下級将校や下士官が先頭に立たなければ、兵がついてくるものではないことは常識だ。すこし年輩の中隊長クラスは、全体を掌握するために、双眼鏡と携帯電話をもって後方の安全地帯にいるはずである。大部隊の指揮官はもつと後方で、電話を受けながら地図を案じているだろう。死傷するのは、市街に突入する若い将兵たちとなる。それが戦闘の法則だ。

イラクに展開する米軍は十五万という。司令部や後方の兵站基地はいざ知らず、前線の若い兵士たちは、二カ月のローテーションで本国からやってくる兵員と交代して帰国する。旧日本軍のように出ずっぱりではない。だから本国をふくめ米軍の全動員数は大へんな兵力量に達するはずである。兵力不足のため兵の予備役まで召集し、その解除の期限を延長しているという。

九条改悪と自衛隊

ヴェトナム戦争の時は徴兵制があったが、不人気で廃止してしまつたくらいだから、今さら志願制を徴兵に改めるわけにはいまい。

日本で憲法九条改悪の動きが加速化したしたのは、当時のアーミテージ米国務副長官が自衛隊のイラク派遣をうながしたことが機縁となつている。湾岸戦争では金だけを出し、今回の自衛隊派遣も「給水部隊」の「非戦闘地域」に限定された。米国の期待も日米同盟の強化を念願する日本の政府も、本音は「戦闘部隊」の派遣なのだが、憲法九条が障害となつて実現しない。九条改悪は、「国際貢献」の美名の下で米軍の軍事支援をおこなうために「戦闘部隊」を派遣することが目的となつていと断定してさしつかえない。

新聞記事でイラクから帰還した自衛隊員への取材を読んだ(朝日、〇四・一二・七)。登場する隊員は六名。二尉(53)、曹長(48)、一曹(43)、三名の二曹(37)(カッコ内は年齢)とある。下級将校や下士官クラスの年齢が異常に高いのに驚いた。旧日本軍の相当階級よりも一〇歳は高い。イラクに戦闘部隊として派遣されたもただちに市街戦に投ぜられるわけではないとしても、戦場は常に予想外の事態の連続であり、いつファルージャヤのような戦闘に参加することになるかはかりがたい。そうなるると高齢化した隊員は正直にいえば役に立たない。二〜三〇歳の若い兵士が決定的に必要となる。筆者のささやかな軍隊経験から断言できる。四〇歳前後の下士官などは文書管理ぐらゐしかできないだろう。

九条改悪阻止の決意を

自民党の改憲案大綱草案なるものが報道された。一たん撤回の上、検討し直すという。しかし集団的自衛権行使の可能な自衛隊設置や国民の国防の義務、そのための国民の権利や自由の制限等があげられている。その基本は変るまい。以上の論理的帰結は、必要あれば政府はいつでも徴兵制を提案できるし、国

会で多数の賛成があれば実現できることになる。あらためて思うのは、九条改悪は徴兵制をよびこむことになることである。日本の若者が米軍の補助的軍事力としてねらわれているのだ。



「不戦・平和」に生きた 一財界人を悼む

村島 昭男

一月一六日、「不戦兵士・市民の会」の語り部、藤岡明義氏が八九歳の生涯を閉じられた。かつて一部上場大企業の副社長として、財界に身を置かれた氏は、一貫して反戦・平和の意志を堅持され、引退後の一九八八年、志を同じくする仲間と上記の会を結成されたのである。会は月刊「不戦」を発行しながら、歴史学者や作家を招いて講演会を開いたり、自ら学校や集会に出向いて、戦争体験を話す語り部として、二度と戦争をする国にしてはならないと思

いで平和憲法の遵守と、平和の尊さを訴えられた。ここにその生涯を追悼するとともに、その思想と活動をわがものとし、憲法、とりわけ九条を守る闘いの糧としたい。一九一五年、大阪府北河内郡長尾村（現枚方市）に出生された氏は、四条暁中学を経て大阪商科大学（現市立大）を卒業、二度の応召の後、奇跡の生還をされ、三和シャッター副社長を最後に企業経営から退かれ、平和の徒としてその生涯を全うされたのである。

一九七九年、玉砕地ホロ島の記録“を副題とする「敗戦の記」が、作家野呂邦暢氏の知る所となり、大岡昇平氏の帯評つきで創林社から刊行された（後、中央公論文庫に）。

その帯文によると両氏は、昭和一九年七月同じ船団で門司を出たらしく、大岡氏はレイテ島、藤岡氏はホロ島と、アメリカ軍に完全に制圧されていたフィリピン戦線に投入された。まさしく、飛んで火に入る夏の虫”であった。

藤岡氏の所属する部隊六千人は、ホロ島に上陸するやたちまち包囲され、艦砲射撃で山の中に追い込まれて敗走、イスラム教徒モロ族の襲撃も加わって六千人は玉砕を余儀なくされた。

この時、藤岡氏は六人の兵と語り、自ら先頭に立って米軍に投降した。「生きて虜囚の辱めを受けず」の、自決を強いる軍律を破り、兵と自らの命を救う事を決行したのである。その後氏らの呼びかけで、八〇名が投降、玉砕が伝えられた中で、八〇の命が救われた。

この勇氣ある行動は何か。氏はい九四〇年最初の応召で中国戦線に従軍、フィリピンは二度目の召集であった。当時、中隊の中で大学出は氏一人だった。したがって幹部候補生志願は当然すめられただろうし、階級だけがものをいう軍隊の中で、星数の増えるのを誰もが望んだはずだ。しかし氏は最後まで星二つを貫き通した。

氏は根っこからの戦争嫌い、軍人嫌いであったと思う。この平和主義が投降に連なっているのだ。そしてかかる思想や精神を培ったのは、進歩と革新の思想と伝統を持つ、大阪商大の学風が、氏の心の奥底に息づいていたからだと思う。

この精神が、軍隊という不条理な世界を反面教師として育まれ、無益で悲惨な戦争、おぞましい「死」を忌む思想になったと思う。

氏は書信の中で「戦争を知らないで改憲を言う若い政治家」を歎かれ、「平和ボケした連中が享受している平和の大基を忘れて改憲になびく」愚かさを憤

つておられた。

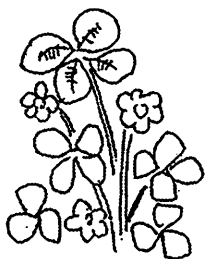
「目先のすぐれた武器による
勝敗はいつとよきのもの、本当の
決着は歴史が証してくれる」こ
れがアメリカと日本のイラク戦
争への氏の断であった。

藤岡氏の、「不戦・平和」の
生涯を追悼し、氏の歩まれた道
をあとづけ、平和憲法、とりわ
け第九条を守る闘いの決意を新
たにするものである。

「幹候の道を選ばす星二つ

兵に準ぜし戦争忌む君

○五年二月七日



追悼

本会の編集委員柴田好人氏は一月一〇日自宅で逝去されました。
同氏は元京商連副会長として活躍された方です。享年八八歳。
謹んで哀悼の意を捧げます。

表紙画作者・執筆者紹介

田中 弘 たなか ひろし
故人。

元日本共産党京都府委員長。

安本久米雄 やすもと くめお
故人。

元岡山県山陽学園勤務。

湯浅 晃 ゆあさ みつる

元京教組委員長。

京都府相楽郡山城町在住。

療養中。

岩井 忠熊 いわい ただくま

日本近代史研究者。

右京区在住。

村島 昭男 むらしま あきお

出版者勤務、労組専従役員等
を経歴。

松戸市在住。

編集後記

前号で「原稿募集のうったえ」
を出したところ、早速に教編の
応募をいただきました。会員の
皆さんが、昨今の情勢、特にイ
ラク戦争への自衛隊派遣と憲法
九条改悪の動向を憂慮しておら
れることをひしひしと感じた次
第です。この号から逐次に掲載
していきます。

安部晋三自民党幹事長代理・

中川昭一経済産業相らが圧力を

かけてNHKテレビの「200

0年女性国際戦犯法廷」の企画

に干渉し、NHKがそれを受け

て番組を改編した問題がいまあ

らためて問題となつています。

これを看過すれば、国民は、与

党・政府の思うままの情報操作

にとりこまれてしまうことにな

るでしょう。こうしてつくり出

された世論の上に、真の民主主

義が成立するはずがありません。

最近に佐藤卓己「言論統制」(中

公新書)を読みました。戦時中

に情報局で言論統制にらつ腕を

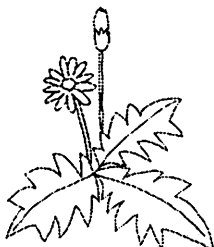
ふるった鈴木庫三陸軍中佐の詳

細な研究です。著者の見解のす

べてに同意するわけでありませ

んが、すくなくならぬ言論機関が
情報局にすり寄つていき、言論
統制が実現されていった経過が
よみとれます。自民党政権とN
HK幹部との関係を重ね合わせ
て連想せずにおれません。これ
はまさしく民主主義の根幹にか
かわる問題です。

憲法九条や教育基本法改悪の
公然とした動きとともに、私た
ちの日常の周辺におこっている
事態をもつときびしく見なけれ
ばならないことを、切実に思わ
れます。



会および会報については、
左記へご連絡下さい。

〔事務局〕

〒六〇六―八一〇七

京都市左京区高野東開町

一―三三 第三住宅

三三―三〇二 井手 幸喜

TEL FAX
〇七五―七二二―三八二三